

『春琴抄』と「グリーブ家のバーバラの話」

南 谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Comparative Reading of *Shunkin Sho* and “Barbara of the House of Grebe”

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Abstract

When Tanizaki Jun'ichiro wrote *Shunkin Sho* (1933), he used “Barbara of the House of Grebe,” the second story of Thomas Hardy's *A Group of Noble Dames* (1891), as a source of inspiration. This essay is an analysis of Hardy's story and an attempt to ascertain what elements Tanizaki incorporated into his novelette, while appreciating what he modified to suit his artistic intentions. In the process, a number of controversial issues concerning *Shunkin Sho* are discussed in detail.

『春琴抄』は、昭和8年(1933年)、谷崎潤一郎47歳の時に発表され、発表当時から、正宗白鳥をして「聖人出ずると雖も、一語を挿むこと能わざるべし」と言わしめ、また今日においても極めて高い評価を与えられている作品である。この『春琴抄』を生み出す上で触媒の一つとして、トマス・ハーディーの「グリーブ家のバーバラの話」(“Barbara of the House of Grebe”)があった事については、佐藤春夫の「最近の谷崎潤一郎を論ず——春琴抄を中心として」(昭和8年12月脱稿)の中の「その後数日偶然語り出した作者自身の言葉によって僕の推察的中していたことは明確になったが、更に作者の説くところによると、グリーブ家のバアバラの場合——その美貌故に愛していた心からの愛人の美貌が変わってしまったあの場合、日本人ならどうするだろうと仮定を進めてみたり、男と女を取

替えてみたりするうちにあんな風に出来て来たというのがその楽屋話であった。」⁽¹⁾という証言がある。

「グリーブ家のバーバラの話」は、次のような物語である。⁽²⁾ 1880年頃の降誕節に、アップランドタワーズ伯爵は、自分の地所から10マイルほど離れた所にある、Chene Manor の領主である、準男爵サー・ジョン・グリーブの一人娘、17歳になったばかりのバーバラとの婚姻を目して、サー・ジョンの屋敷で開かれた舞踏会を訪れる。舞踏の途中で、アップランドタワーズ伯爵に対し特別の好意も嫌悪も示さなかったバーバラは、頭痛を理由に自分の部屋に戻りたいと言い、その夜はそれ以上姿を見せなかった。伯爵は、儀礼上暫く留まった後、舞踏会を辞し、バーバラから自分に対して格別の好意は示されなかったものの、全ては時間の問題であろうと思いながら自分の屋敷に戻る。

翌朝、何事か慌てた様子のサー・ジョンが伯爵の屋敷にやって来て、バーバラはどこにいるのかと尋ねる。何の事だか不得要領の伯爵に、サー・ジョンは、実はバーバラが昨夜以来どこにも見当たらないのだと説明する。そう言えば昨夜、舞踏会の会場から遠ざかっていく二つの灯を見て、ずいぶん早く帰る客もいるものだと訝り、グリーブ夫人との話の折、その事に触れると、夫人がまだ誰も帰った客はいないと言ったので、変に思った事を覚えている伯爵は、さてはそれがバーバラの出ていくところだったのだと気づく。サー・ジョンは、自分の娘を連れ去ったのが、Shottsford-Forum の、エドモンド・ウィローズではないかと危惧するが、その危惧はやがて届けられたバーバラからの手紙によって確証される。バーバラはこのままいけば両親からアップランドタワーズ伯爵との結婚を強要されるのを知って、愛するウィローズとロンドンに駆け落ちし、手紙が着くころまでには、既に結婚の手続きを済ませてしまっているという。エドモンドの父はガラス絵職人で、エドモンドがまだ若い頃に亡くなり、エドモンドは母親一人の手で育てられた。エドモンドもその父親も、正直者ではあったが、血統的には、グリーブ家、特に母方の家柄とはとても釣り合うような人間ではなかった。

バーバラの両親は、強引な法的処置に訴えるのを見合わせ、事態を静観して約6週間が過ぎた頃、当初の激情も冷め、なけなしの資金も使い果たした若い夫婦は、和解を陳情する手紙を寄越した。グリーブ夫妻は、すぐに受け入れる返事を出し、萎れきった二人との対面を果たすが、その折、グリーブ夫人は、エドモンドの美貌に驚嘆し、娘が彼を選んだ理由を合点する。

結局、夫妻はこの結婚を認め、エドモンドには資金を与えて、一年間、チューターつきで大陸を旅行させ、グリーブ家の跡取りとして相応しい教養と身だしなみをつけさせることにし、帰ってきた暁には、二人は Yewsholt にある地所に住むことが取り決められた。

チューターと一緒に出掛けたエドモンドは、訪れた各地から手紙を寄越し、それによっ

てバーバラは、エドモンドが、所期の成長を果たしつつあるのを窺う事が出来た。しかしバーバラは、かつての友人達が、異例の結婚をした自分に冷ややかな視線を向けているのを意識せざるを得ず、また自分でも、そばにエドモンドがいないために、自分自身の彼に対する愛情の確認が出来ないのを嘆じ、エドモンドに、彼の小さな肖像画を送ってもらえないかと頼む。エドモンドは、ピサで彫刻家と友人になっていたので、大理石の胸像を作ってもらいそれを送る事にした。そして次の手紙では、喜ばしくも彫刻家自身の意向で、胸像ではなく、等身大の彫像に変更された旨知らせてくる。

バーバラは、二人が住むことになる家の修復状況を見るためにしばしばそこを訪れる。それは人里離れた斜面に立つ鬱蒼とした木立に囲まれた屋敷であった。ある日バーバラは、アップランドタワーズ伯爵が馬に乗ってそこに通りかかるのを見る。かつては何を措いても立ち寄ったであろう伯爵は、今は彼女に向かって挨拶はしたものの、そのまま通り過ぎていく。バーバラは、自分の夫に対する愛情が枯れてしまわないようにと祈り続けた。その後、彼女は体調を崩し、長い間家の中に引き籠ったままとなった。

エドモンドの研修旅行が、予定の1年を越えて、14カ月になんなんとした頃、サー・ジョンの許に、エドモンドからではなく、彼のチューターから、ヴェニスで起こったある災禍についての報知が届く。それによると、前の週の謝肉祭の週のある晩、このチューターとエドモンドが劇場で喜劇を鑑賞していたところ、突然の火事に見舞われた。幸い、勇敢な観客が、意識を失った人々を次々に運び出したので、命を失った人はほとんどいなかった。中でも最も勇敢だったのはエドモンドで、彼は燃盛る火の中へ5度までも飛び込んでいった。しかしその5度目の救出の試みの時、彼の上に梁が焼け落ち、彼の命は絶望視された。ところが天の摂理によって、彼は重い火傷を負いながらも、まだ息があるのが発見され、そして驚くべき強靱な生命力によって今回復を果たしつつあるという。

バーバラは、彼の許に飛んでいきたい気持ちに駆られたが、彼女の健康状態、この時期の大陸旅行の困難を考えると躊躇されるのであった。しかも手紙の終わりにはチューター自身がそのような行為を見合わせるようにと、医師の同様の意見を含めて、勧告してあった。

その後に届いた知らせによって、その勧告の理由が明らかになった。エドモンドは、その頭部と顔面に、繊細な女性が見るには耐えられぬほどの、最重度の火傷を負っていたのである。

グリーブ夫人は、エドモンドは、たった一つ的美質を失ってしまった、バーバラがもう一人の候補者と結婚していればよかったものをと、サー・ジョンとバーバラが、心では思っている口には出さなかった事をはっきりと言って溜息をついた。バーバラはこうした言葉を聞くのが嫌で、改装された Yewsholt の屋敷に、女中達と一緒に移ってしまった。

それから何週間も経過した頃、十分に回復したエドモンド自身からの手紙が届き、それによって彼の受けた傷害がいかにか重いものであるかが現実のものとして実感された。彼は、バーバラに会っても、彼女が彼と見分ける事が出来るかどうか疑問だけれども、自分の彼女に対する気持ちは少しも変わっていないと訴えるのであった。

これに対し、バーバラは、どのような姿であっても、妻として彼の帰還を歓迎すると返事を書いたものの、彼の美貌が失われた失望感や、彼と一緒に過ごしたのはほんの数週間であるのに、離れ離れになってもう長い時間が経過した事に対する奇妙な感じについては触れなかった。

そしてついに彼が帰ってくる日が訪れた。彼はサウサンプトンに上陸し、そこから馬車で Yewsholt に向かい、バーバラは、彼が駆け落ちの前夜を過ごした Lornton Inn まで出迎える事にした。バーバラは、Lornton Inn に着くと、エドモンドの馬車に同乗して帰る手はずになっていたのに、自分の乗ってきた馬車は返し、エドモンドの馬車が現れるのを待った。しかし予定の時刻を2時間過ぎても、彼女の待つ馬車は姿を現さなかった。彼女は失望とも安堵ともつかぬ心持ちで待ち続けたが、やがて自分が衆人環視の中に置かれているのに気づいた。彼女とエドモンドについての話は、近隣の人々のただならぬ好奇心を掻き立てていたからである。どのような手段を用いてもこの場から逃げ出そうと心を決めた矢先、遠くに馬車の立てる土埃が見えた。

馬車は、Lornton Inn に近付き、そのまま通り過ぎようとしたが、中にいた者がバーバラの姿を見ると彼女に呼び掛け、馬車は止まった。声の主は、偶々そこを通り掛かったアップランドタワーズ伯爵であった。彼女が事情を話すと伯爵は、彼の隣の席に彼女を乗せ、Yewsholt まで送る事にした。二人の間に交わされる会話は、最初はぎこちない途切れ途切れのものであったが、やがて雰囲気はほぐれてくるにつれ、バーバラは、自分でも驚くほど熱心に伯爵に話し掛けているのだった。

Yewsholt に送り届けられて一人になったバーバラは、会う事を前もって知っていたら慎重に回避していたであろう、今し方の伯爵に対する親しげな態度を顧みて、そのはしたなさに冷や汗の出る思いをした。そこで、自分に対する懲罰の意味も籠めて、今晚帰る可能性はないものの、夫の帰還を深夜まで待つて起きている事にした。

木立の騒めきの他は、しんと静まり返った深更、馬の蹄と車輪の音が屋敷の外にした。この時間に来るのは、エドモンドの他にはないと知って、バーバラは、何か気を失いそうになりながら玄関に急いだ。彼女が戸を開けた次の瞬間、黒い外套に身を包み、帽子を目深に被った、見知らぬ——その輪郭には記憶があったが——一つの形姿が入ってきた。それが更に進み入り、ランプの灯を浴びるようになると、バーバラは、ほとんど恐怖といってもいい驚きとともに、その顔が精巧に作られたマスクであるのに気づいた。それは果た

して、帰って来たエドモンドであった。彼は、人目を避けるためにこのようななりをしているのだと説明したが、その声も話し方も以前とは別人のようであった。手袋を脱ぐとその手は瘻ひきつれていて、指は1、2本欠けているようであった。ややあって、バーバラと差し向いに腰を掛けたエドモンドは、不安に身を震わせているようであったが、ヴェニスで作ってもらったというマスクを今ここで外してもよいかと尋ねた。バーバラは、心構えは出来ているから大丈夫だと、再度尋ねるエドモンドに請け合う。

In the pause which followed, the ticking of the clock in the hall seemed to grow loud ; and he turned a little aside to remove the mask. She breathlessly awaited the operation, which was one of some tediousness, watching him one moment, averting her face the next ; and when it was done she shut her eyes at the dreadful spectacle that was revealed. A quick spasm of horror had passed through her ; but though she quailed she forced herself to regard him anew, repressing the cry that would naturally escaped from her ashy lips. Unable to look at him longer, Barbara sank down on the floor beside her chair, covering her eyes.⁽³⁾

バーバラのこの反応を見た、エドモンドは、自分の命を救ったヴェニスの医師を呪い、バーバラに、自分の姿をもう一度見て、自分をおぞましく思うと言ってくれ、そう言ってこの問題に決着をつけてくれ、と懇願する。バーバラは夫に対する献身の念を奮い起こし、彼には何も悪いところはない、彼こそ苦しんだのではないかと自らに言い聞かせ、再びこの“*écorché*”を見たが、やはり耐えきれずに目を背け身震いした。そして、おぞましいなどと思うわけではないが、とにかく気を落ち着けて、かつてのエドモンドに対する感情を取り戻すために暫く自分の部屋へ行くことを許してほしい、と言って、返事を聞く前に立ち上がった。

自分の寝室に戻ると、丁度真下の部屋にいるエドモンドの挙動が音で伝わって来た。その音が、やがてこちらに向かおうとしているのに気がついたバーバラは、この深夜にこの寝室である姿と二人きりなるのかと思うと、もう全ての自制心を喪失し、部屋から飛び出し、裏階段を使って外に出た。そして温室の中に野鼠のように身を隠し、足音がこちらに近づいてくるのではないかと身の竦むような思いで夜の明けるのを待った。

東の空がうっすらと明るんでくると、夜に感じたあの恐怖は薄らぎ、今だったら正視出来るような気がして、バーバラはエドモンドを探した。しかし彼はどこにも見当たらず、テーブルの上に、彼女の前から姿を消す決心を述べたメモが残されているばかりだった。

*

『春琴抄』においては、冒頭に引いた佐藤の文章にもあったように、美貌の持ち主が男

性から女性に転換されているが、ひどい火傷によって、その美貌が致命的に損壊されるというモチーフは共通している。そしてそれが正視に耐えぬような醜怪さを帯びている事も、物語の上で、それが一つの山場を形成している事も同一である。また醜怪さの齎す恐怖感を読者に印象づける手法についても、「グリーブ家のバーバラの話」同様、『春琴抄』も、「一生相好が變る程の凄まじい危害」という語り手自身の予告から、「雪を欺く豊頬に熱湯の餘沫飛び散りて口惜しくも一點火傷の痕を留めぬ。素より白壁の微瑕に過ぎずして昔ながらの花顔玉容は依然として」という、春琴没後の三回忌か何か、温井検校こと佐助が編ませたという「鴟屋春琴伝」の、語り手によれば「故意の曲筆」であるという、語り手の断定とは裏腹の、極めて軽微な印象を与える叙述、それから、「事實は花顔玉容に無残な變化を來したのである」という語り手による再逆転の断定、「焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに二箇月以上を要した中々の重傷」という、盲目の春琴佐助を12歳の時から幫助してきた鳴澤てる女、及びその他二三の人の、遠慮がちに客観的なレベルに留めた話、「毛髪が剝落して左半分が禿げ頭になつてゐた」という「種々奇怪なる噂」を経て、読者に最も決定的な印象を残す、「焼け爛れた顔を一と眼見たことは見た…正視するに堪えずして咄嗟に面を背けたので燈明の灯の揺めく蔭に何か人間離れのした怪しい幻影を見たかのやうな」という、春琴の死後十餘年を経て、温井検校が語るのを聞いたという側近者の話に至っており、伝聞による想像力の刺激を利用しながら、決定的な事実をすぐには提示せず、小出しに、先延ばしにしながら——「グリーブ家のバーバラの話」においては、馬車の遅延、マスク等がその device になっている——語る手法が採られている。

しかし、この災厄を、相手がどのように受けとめたかという点になると、「グリーブ家のバーバラの話」と『春琴抄』は大きな相違を見せる事になる。バーバラが、醜怪さに対する本能的な恐怖と嫌悪に屈し、ある意味で相手を捨てたのに対し、「日本人」佐助は、春琴の、佐助にだけは見られたくないという気持ちを汲み、自らも眼を突き盲目となって、相手に対する献身を貫いている。それに対する春琴の反応は、「鴟屋春琴伝」では「春琴之を聴きて憮然たること良々久し矣」となっているが、これも温井検校の「故意の曲筆」とすべきか、後の談の伝聞による記述では、

程経て春琴が起き出でた頃手さぐりしながら奥の間に行きお師匠様私はめしひになりました。もう一生涯お顔を見ることはござりませぬと彼女の前に額づいて云つた。佐助、それはほんたうか、と春琴は一語を發し長い間黙然と沈思してゐた佐助は此の世に生れてから後にも先にも此の沈黙の數分間程楽しい時をきたことがなかつた。

と、数万言の雄弁にも勝るような、沈黙による東洋的な心の通い合いが叙され、素朴に

読めば『春琴抄』の中でも最もしみじみとした場面の一つになっている。「東西二つの小説は、男と女が反対の立場にあるが、結果的にも、全く逆になって現われている。潤一郎はあまりにも物質的な西欧の考え方に対して、反対の結論を出したわけである。」⁽⁴⁾というように典型的とも思われる読者の反応は、作者の意図にも含まれていたであろう。

しかし一方、エドモンドが自分の真実の姿を相手に見せ、それを相手が受け入れるかどうかを完全に相手の自由意志に委せ、バーバラも、飽くまで真実を正視し、然る後にそれを受容しようと懸命の努力するのに対し、春琴は佐助に自分の真実の姿を見ないように懇願し、佐助も、最初から「御安心なされませお白は見は致しませぬ此の通り眼をつぶつてをります」と、「真実の正視」など最初から眼中にないかの如く振る舞っているのは、西洋から見れば、成長しきっていない小児の取るような態度ではないか、という批判も当然予期されるのである。

「グリーブ家のバーバラの話」では、身分の違いが決定的な重みを持つ設定になっている事は一読して明らかであろう。エドモンドが大陸の研修旅行に出掛けたのは、彼の家柄がバーバラのそれとは比較にならぬほど劣ったもので、挙措動作から言葉遣いに至るまで、英国人であれば直ちに気づくような階級差を少しでも緩和しようとする試みにほかならず、それが彼の悲劇と因果の糸で結ばれている。(その意味では、サー・ジョン・グリーブは、グリーブ夫人よりも家柄が低かったように描いてあり、その分苦労があったに違いなく、どちらかと言えばバーバラの階級無視の行為に同情的で、失踪の際にも、義務的な範囲以上には捜索しないで夫人に窘められるなど、『春琴抄』には無い、少し comical な調子も含まれている。) 貴族階級を貴族階級たらしめているのは、洗練された挙措動作や言葉遣いだけでなく、その所有する土地、財産でもある。バーバラは容貌にも比較的恵まれた女性であるが、何よりも彼女を魅力的にしているのが、彼女の“heiress”としての、アップランドタワーズ伯爵の言葉を用いれば、“bright-eyed property”⁽⁵⁾としての地位であり、その魅力は、エドモンドにしても抗し難かった事であろう。箱入り娘で育ったバーバラは、物質的に何不自由ない生活を送ったればこそ、身一つで駆け落ちして、“any other country-townsman’s wife”として生きるに吝かでないなどと啖呵が切れるのであるが、その意気は、読者の予想に違わず、数週間と持たない。彼女の悲劇は、一面でこの厳しい社会的現実を軽視したところに胚胎している。

『春琴抄』の場合にも、身分の違いという設定は、見かけ以上に重要な役割を果たしている。春琴は、大阪道修町の代々続いてきた鴟屋という薬種商の二女であり、一方佐助は、「江州日野の産であつて實家は矢張薬屋を営み彼の父も祖父も見習ひ時代に大阪に出て鴟屋に奉公したことがあるといふ鴟屋は實に佐助に取つて累代の主家」であり、春琴と佐助は、封建性を色濃く残存させた主従の関係にある。そのままでは夫婦にはとてもなれない

身分差を持つという点で、春琴、佐助は、バーバラとエドモンドと似ているが、『春琴抄』では、春琴に盲目であるというハンディキャップを持たせる事によって、二人の結びつきの違和感が幾分緩和されている。しかしもっと注目すべきであるのは、「西洋」が、身分の違いを越境しようとして災厄を招くのに対し、春琴と佐助は、実質的な夫婦関係に入っても、主従関係を変えようとしなないという事である。春琴は両親から佐助を婿に迎える話を持ち掛けられても、「意外にも…にべもなく峻拒し」、「自分は一生夫を持つ気はない殊に佐助などゝは思ひも寄らぬと甚しい不機嫌であつた」し、佐助のほうも、最後まで春琴にまめめしく仕え、墓石になってさえも、「鞠躬如として侍座する如く控へ」、主従の隔てを守っている。

『春琴抄』が執筆された昭和8年、谷崎は、二番目の夫人との危機が決定的となり、三番目の夫人となる女性との恋愛関係に入っており、この時期後者に宛てたと思われる手紙の一節で「独身生活を送るか、然らざれば一生身命を捧げて奉仕致すに足るような貴き方を得て、その御方の支配に任せ、法律上は夫婦でも実際は主従の関係を結ぶ」生活を理想として訴えているのはよく知られている。⁽⁶⁾ この一見奇矯な実生活上の趣向が、ほぼそのまま佐助の意向に取り込まれている。つまり、谷崎と佐助は、男女の仲を裂くはずの「身分の違い」を逆手に取って、それを男女の仲を取り持つもの、夫婦関係を生色あらしめる願わしいものとして利用しているのである。

* *

しかしながら「グリーブ家のバーバラの話」が、東洋の美德を引き立たせるためにのみ存在意義を持つ西洋の凡庸な小説であると考えるのは、少なくとも公正な見方とは言い難い。物語の続きをしてみる事にしよう。エドモンドの置き手紙には、自分は英国から1年間姿を消すが、その後生きていたらもう一度会ってもらいたい、そしてその時も受け入れてもらえなければ永久に姿を消す事にする、と書いてあった。バーバラは、これを読むと激しい“remorse”に苛まれ、何としても留まってもらおうとエドモンドを探したが、彼は既に去った後であった。約束の1年が過ぎた。しかしエドモンドは現われなかった。バーバラの“contrition”は、彼女を駆って、教会への寄進を申し出させたり、慈善行為に走らせたりした。しかし人の心の変り易き事、蔦の葉の色を変えるが如し——彼女は、こうなって結局はよかったという周囲の声を、じっと動かずに聞いていられるまでになった。あの凄まじい姿は思い出しても未だに彼女を身震いさせたが、一方、結婚当時のエドモンドを思い出すと、彼女の身体は優しい感情に貫かれるようであった。

エドモンドは約束を破るような男ではなかったので、バーバラは次第に彼が死んだものと思いなすようになった。両親もそう思い、また、もう一人の、眠っているように見える

時でも常に如才なく目覚めている男も、そう思うようになっていた。そしてバーバラが再び両親の館の Chene Manor に戻り、幾年かが経つうちに、アップランドタワーズ伯爵が再びその客人となる事も次第に頻繁になっていった。そしてバーバラも彼に馴染み、彼を権威と判断力と分別の備わった人間と思うようになり、彼が、彼の地所の密猟者や盗人に対して、裁判所でどれほど冷厳であるかについての人々の噂は、その多くが歪曲されたものだと言った。

このようにして、エドマンズの死が確実にようになっていくにつれ、バーバラは、愛してこそのいないものの、その先祖が異教徒のサラセン人を蹴散らしたというアップランドタワーズ伯爵は、世間的に見るならば、その父と祖父が立派な市民であったというだけの男よりは、夫として、より望ましいのではないかと思うようになった。かくしてバーバラは、正式に寡婦となり、続いてアップランドタワーズ伯爵と結婚した。結婚前、伯爵は、バーバラの自分に対する熱のなさをそれほど気かけなかったが、結婚すると腹立ちを隠そうとしなかった。伯爵は、このままでいくと遠縁の者に渡ってしまう自分の地所を継いでくれる者の誕生を待望していたのだが、この分ではその望みも叶わなくなってしまうようであった。

そんな陰鬱な生活が続くある日、ウィロズ夫人と宛名の書いてある手紙がバーバラの許に届けられた。それはピサの彫刻家からの手紙で、夫君の彫像が完成して久しいが、その後夫君からの連絡が途絶え、彫像がアトリエの場所を取って困っているのもので、出来れば製作費の残金を支払って、どこに送付すればよいかを連絡してほしいという文面であった。バーバラは、伯爵には何も言わず、残金を精算し、彫像を彼女のところへすぐ送るよう返事をした。

彫像は数週間後に届いた。それを待っている間、奇妙な偶然というのであろうか、バーバラは、エドマンズがやはり死んでいたという、彼の親戚からの確実な消息に接した。それによると、エドマンズは、バーバラと別れて後、火傷の後遺症と精神の鬱屈のために、罹患した軽微な病にも打ち勝てず、異郷で息を引き取ったという。バーバラは、“passionate pity” に心を裂かれるようで、火傷の痕くらい、生来の美貌の思い出によって埋め合わせる事をしなかった自分を難じた。

その数日後、2頭立ての馬車が巨大な包みを運び込み、朝食の席の伯爵を訝らせた。バーバラは、それがエドマンズがかつて注文していた彫像である事を告げ、朝食後二人は包みを解いて出来栄を見てみる事にした。彫像は完璧な忠実さでエドマンズの美貌を再現していた。バーバラは、それにただもううっとりとし入っているうちに、破壊されたエドマンズの記憶が彼女の脳裏から消えていった。その午後館に帰って来た伯爵は、彫像の前に未だ陶然と立ち尽くしているバーバラを見出した。

伯爵は不快を隠そうとしなかった。そこでバーバラは翌週、数日間伯爵が館を留守にし

た折りに大工を雇い入れ、自分の居室の奥まったところに一種の壁龕を作らせ、そこに彫像を隠し入れて、扉に鍵をかけた。

戻って来た伯爵は、彫像が見当たらないので、バーバラがどこかに処分したものと思い、それ以上は詮索しなかったが、妻の顔にこれまでには見られなかった、“a sort of silent ecstasy, a reserved beatification” の表情が浮かんでいるのを見出し、また彼女の居室に新しく手が加えられている事を知って、バーバラがそこに彫像を隠したのだと密かに察しをつけた。

ある夜、ふと目覚めた伯爵は、隣にバーバラの姿がないのを不審に思ったが、深くは気に留めず再び眠りに落ちた。しかし数日後、それは繰り返され、やがて上気したバーバラが蠟燭を手に寝室に戻ってくるのを見るに及んで、伯爵は何か異常なものを感知し、次の夜、寝たふりをして様子を窺っていると、果たせるかなバーバラが静かにベッドを抜け出し、闇の廊下に出ていった。伯爵はそっと起き出し、気づかれぬように後をつけた。バーバラは廊下の端で蠟燭に火をつけると、それを持って彼女の居室に入ってしまった。伯爵は、入り口に忍び寄り、開いたままになっているドアの隙間から中を覗くと、“Barbara ... standing with her arms clasped tightly round the neck of her Edmond, and her mouth on his... Between her kisses, she apostrophized it in a low murmur of infantine tenderness.” という異様な光景が彼の目を射た。バーバラは、伯爵が彼女に予想だにできなかったような激しい情熱を見せていた。

翌日、伯爵は、かつてエドモンドの大陸旅行に同行したチューターの居所を探し当て、都合がつくとすぐに出掛けて面会した。この元チューターは、あるグラマースクールの校長になっていたのだが、伯爵という名士の訪問に気を良くして、聞かれる事には何でも洗いざらい答え、それによって伯爵は、エドモンドの災厄の真相を知る事が出来たのであった。最後に、罹災後のエドモンドの頭部のスケッチが描かれ、伯爵に渡された。伯爵は、バーバラが彼女の両親の許へ立ち寄って留守にした時を見計らい、近くに住む手先の器用な画工を呼び、バーバラの居室の壁龕の鍵を開け、中の彫像に、元チューターの描いたスケッチ通りの変形を加えさせた。欠けている部分にはノミを揮わせ、肉の爛れた部分には彩色を施させた。そして全ての作業が終わると再び扉を閉め鍵をかけた。その夜、伯爵が再び眠ったふりをしてしていると、午前2時頃、バーバラはベッドから抜け出し、闇の廊下へ出ていった。伯爵はベッドに横たわったまま耳を澄ませていた。静まり返った夜の静寂の中で、バーバラがつけた火口にそっと息を吹き掛ける音までも聞こえるようであった。やがて彼女が居室に入る音がし、次の瞬間、大きな、長い、屋敷の隅々にまで響き渡るような叫び声上がり、続いて、重く落下する音が聞こえた。現場に駆けつけた伯爵は、失神しているバーバラを抱き起こし、暫くして眼を開けた彼女を抱きかかえて、腐食性と偏愛

と残虐性の入り交じった笑い声を立てながら、寝室に戻り、まだエドモンドを愛しているのかと詰問した。正気づいたものの、まだ神経が動揺しているバーバラは、大きく見開いた眼を伯爵に釘づけにしながらかみもりつつ否定した。

しかし翌朝、同じ質問を伯爵がすると、彼女の精神は弾力を取り戻しており、伯爵の視線に怯みつつも、嘘を言う気にはなれないと撥ね返した。それを聞いた伯爵は、彼女の手首を攫み、もう一度彫像の前に強制的に連れていくそぶりを見せた。するとバーバラは急に激しい反応を見せたので、伯爵は、昨夜の処置がまだ効果を持続させている事を読み取り、もう一服か二服盛れば、病から全快させる事が出来ると判断した。

その日、伯爵は、4人の人夫を雇い入れ、バーバラの部屋の彫像——それには上半身に布が掛けてあった——を運び出し、寝室の中に搬入させた。その夜、バーバラは、寝室のベッドの足下に見慣れない衣装箆が置かれているのに気がついた。伯爵は、これは神殿で、中には我々二人が等しく崇めているものが祭られているのだよ、と説明し、寝たままそぼのカーテンの間に垂れている紐を引くと、箆の扉がゆっくりと開き、両脇で燃えている蠟燭の灯に照らし出された、あの恐るべき形姿が浮かび上がった。バーバラは発作的に伯爵にしがみつき、鈍い叫び声を発し、彫像を部屋から出してくれと哀願した。伯爵は、いいとも、君が私を一番愛してくれていると分かればそうしよう、君はまだ私を十分には愛していないのだろうか？ まあ、何事も慣れだから、もう一度よく見てご覧、と未だ伯爵を愛しているとはどうしても言う事が出来ないバーバラに命じた。

... and such was the strange fascination of the grisly exhibition that a morbid curiosity took possession of the Countess as she lay, and at his repeated request, she did again look out from the coverlet, shuddered, hid her eyes, and looked again, all the while begging him to take it away....⁽⁷⁾

しかし伯爵は一晩中扉を開け放ったままにして、次の夜にも同じ“virtuous tortures”を施し、バーバラを懊悩で打ち震わせた。そして、

The third night, when the scene had opened as usual, and she lay staring with immense wild eyes at the horrid fascination, on a sudden she gave an unnatural laugh; she laughed more and more, staring at the image, till she literally shrieked with laughter: then there was silence, and he found her to have become insensible.⁽⁸⁾

長い間経ってから正気づいたバーバラには何か本質的な変化が生じており、伯爵の首に両腕を投げ掛け、何度も何度も接吻を重ねながら、伯爵に対する愛とエドモンドに対する

嫌悪を誓うのであった。そして、その虚構の愛と見えたものは、習慣のうちに真実の性質を帯び、彼女は常に夫に寄り添い、眼を彼の顔から放さず、伯爵の行く所へはどこへでも同行し、伯爵が他の女性に優しくしたりすると、嫉妬に狂ったようになった。そして、どんな仕打ちを受けても2度と自分自身の世界に引き籠るという事をしなかった。バーバラは、9年の歳月の間に11人の子供を産んだ。しかし、そのうち生きて成人したのは1人の女兒だけであったと言う。ずっと後代になり、この屋敷の増築の為に地面を掘っていると、大理石の像の破片が幾つも出てきた。鑑定を依頼されたある古物研究家は、損壊した古代ローマのサチュロス像に思われると言い、また別の研究家は、死神の寓話的表現であろうと言ったと伝えられている。

* * *

谷崎自身がハーディーのこの物語を「グリーブ家のバアバラの話」として翻訳し『中央公論』に掲載したのは昭和2年だが、この作品を最初に読んだのはいつであるかという問題については、千葉俊二氏の「『グリーブ家のバアバラの話』の翻訳をめぐる」⁽⁹⁾の中でなされている推定が、恐らく当を得たものであると思われる。「青い花」(大正11年3月『改造』)の暗室に置かれた女性の大理石像、「永遠の偶像」(大正11年3月『新潮』)の、植村が製作しているやはり理想的な女性美を目指した彫像、「本牧夜話」(大正11年7月『改造』)の、硫酸による容貌の棄損が惹起する人心の変化といった、「グリーブ家のバーバラの話」に類似したモチーフの、平板な適用と集中的な現れを見ると、この大正11年を遡る事それほど遠くない時期にこの作品を読み、かなり強い impact を受けたであろう事が推察されるのである。太田三郎氏の「トマス・ハーディーと谷崎潤一郎」⁽¹⁰⁾によれば、日本におけるトマス・ハーディーの受容は、「明治23年(1890)の紹介にはじまり、ポツポツと断続した紹介や翻訳が、大正期にはいつてややめだってきた。そして大正十三、四、五年(1924-26)とようやく盛んになってきた」という事で、千葉氏の仮説は、時代風潮的にもよく合致している。

では、一体「グリーブ家のバーバラの話」のどこに谷崎が注目したかという事だが、この点についても千葉氏の考察が参考になる。⁽¹¹⁾ 谷崎が鶴沼時代に英訳のプラトン全集を読んでいたという和辻哲郎の証言(谷崎の鶴沼転居は大正7年3月)は、「前科者」(大正7年2-3月『読売新聞』)、「金と銀」(大正7年7月)の中に開陳されるプラトンの「イデア」を思わせる美学と呼応し、さらにこの「プラトニズム」は、「アゼ・マリア」(大正12年1月『中央公論』)、「肉塊」(大正12年1-4月『東京朝日新聞』)、「青塚氏の話」(大正15年8-9月、11-12月『改造』)においても、継続して顔を覗かせている。尤も、創作活動そのもの、特にこの時期に谷崎が強い関心を寄せる演劇や映画というメディアには、appear-

ance と reality の乖離、identity に纏る紛糾が本質的に内在していて、そういう実体験から得た認識の裏付けとしてプラトンを繙読したのかもしれない、プラトニズムが谷崎の「永遠の女性」を産み、文楽の発見に至るといふように直線的な因果関係として断定するには慎重にならなければならないと思うが、谷崎が鶴沼時代の前後から、こうした問題を意欲的に創作に取り入れようとしていた事は明瞭である。しかしこれらの「アイデア」論の作品への導入は、幾分強引で生硬であり、谷崎自身やや持て余し気味であったのではなかろうか。そうした時期に「グリーブ家のバーバラの話」に接したと仮定すると、その彫像という意匠が一つの大きなヒントを与えたであろう事は十分に想像されるのである。

「青塚氏の話」では、彫像製作がプラトニズムの主題と絡み合うようにはなっており、また晩年の傑作である『鍵』や『瘋癲老人日記』における谷崎の hallmark となる諧謔味の萌芽が見られるものの、高い文学性は獲得されていない。谷崎の永年の夢であった西洋行きをいよいよ実行しようとした大正12年、関東大震災は東京、横浜の市街とともにその夢を破壊し、それに続いての関西移住は、谷崎の運命の大きな岐路となった。昭和3年の岡本の梅が谷に家を普請した辺りから谷崎の作風に大きな変化が現れてくるのは周知の通りだが、「青塚氏の話」と『春琴抄』との距離は、この時期の谷崎の作家としての器量の長足の進歩を如実に物語っているように思われる。

『春琴抄』には、彫像は出てこない。しかし、佐助が、盲目になる事によって「現実に関眼を閉ぢ永劫不変の観念境へ飛躍し」、「現実の春琴を以て観念の春琴を喚び起す媒介とした」というところは、彫像のモチーフの同工異曲と言えよう。そしてバーバラが彫像を抱擁しながら感じていた至福をも佐助は共有している。「金と銀」の、白痴化した天才的画家の青野が、真実の美の国の「栄子」のアイデアの足下に跪きその衣の裾に接吻しながら項を撫でてもらっている至福も、それと同種のものに違いないが、『春琴抄』に比べれば、あまりにも観念的な憾みがある。

しかし佐助の至福が、天からの祝福のように描かれているのに対し、バーバラのそれが病的に描かれているのは注目される。“Barbara of the House of Grebe” が発表されたのは1889年、性的表現に極めて厳しい制限が課せられ、露骨な描写はタブー視されていたヴィクトリア朝の事であった。従ってこうした問題に触れる時、作家は非常に手の込んだ婉曲表現を余儀なくされた。例えば、エドモンドの彫像が、裸像ないし半裸像であった事はなかなか気づきにくいと思われるが、後年発掘された彫像の断片（それによって、伯爵がこの像を叩き壊してから埋めた事が分かる）を、ある考古学者が、ローマ時代のサチュロス像ではないかと推察している事によってそれが間接的に暗示されている。（当時の衣服をつけた彫像であれば、サチュロス像というような解釈が出て来る可能性はない。）また、バーバラの居室から、彫像を寝室に移そうとした人夫たちは、その像の頭部が布で包んで

あるのを発見する——この部分、谷崎訳では、人夫たちが布で包んで運び出すと訳されていて、この含みを谷崎は把握していない——が、それは、バーバラがまだこの像の首から下に未練を残している事を物語っているのである。またもっと微妙な事だが、ピサの彫刻家が胸像を注文されたのに、彼自身の関心によって全身像に変更したというのは、当然エドモンドが彫刻家の前で裸身を曝し、彫刻家がそれに並々ならぬ関心を寄せた事をも暗示している。

それに対し『春琴抄』は、「肉体」をどのように遇しているだろうか。春琴は、佐助と同じ家に起居するようになってからは、鳴澤てる女の回想によると、「厠から出ていらしつても手をお洗ひになつたことがなかつたなぜなら用をお足しになるのに御自分の手は一遍もお洗ひにならない何から何まで佐助どんが上げて上げた入浴の時もさうであつた」とあり、「春琴の肉体の巨細を知り悉して剩す所なきに至」っていた佐助も、それを描く作家も、誠に自由であつて、倫理的な禁忌はなきが如くである。西洋におけるキリスト教の性的抑圧から来る病理は、「グリーブ家のバーバラの話」の一つの隠然たる主題でもある。バーバラが、エドモンドの彫像への恋慕に至る過程で銘記しておかなくてはならないのは、彼女の情熱は、新婚生活の数週間で既に冷めかけており、さらにエドモンドの14カ月に亙る大陸旅行の不在によってますますその基盤を崩されていたという事である。元々そうであれば、醜怪に変貌した、臍に記憶しているだけの男に強い愛情の発露を望むのは無理である。しかし自分が不幸な「夫」に対する“duty”を果たせなかつたという自責の念は、“remorse” “contrition” “passionate pity” という、宗教的な grid の形を取って彼女を圍繞し苛んでいく。その逃げ道を、彼女がかつて愛することができた（と思った）過去の幻影が僅かに提供していたところへ、その幻影を永遠化してくれる（と思った）彫像が届いたのである。しかし、それに縋りつく彼女の至福も、“a sort of silent ecstasy, a reserved beatification” という宗教的な偏向を帯びたものになっている。このように、女性が、形骸化した宗教的観念の脈絡の中でしか愛情を考える事が出来ない因習に対して、作者ハーディーが批判的な視線を注いでいる事は言うまでもない。彫像の抱擁はそのグロテスクな表現になっている。

『春琴抄』においても、「青塚氏の話」では諧謔味の中に埋没していた宗教性ともいふべきものが、比較的前面に押し出されて語られている。佐助が眼を針で突いて盲目となり、現実に眼を閉ざした時の、「もう衰えへた彼の視力では部屋の様子も春琴の姿もはつきり見分けられなかつたが繻帯で包んだ顔の所在だけが、ぼうつと灰白く網膜に映じた彼にはそれが繻帯とは思へなかつたつい二た月前迄のお師匠様の圓滿微妙な色白の顔が鈍い明りの圈の中に来迎佛の如く浮かんだ」という描写に見える春琴像は、よく指摘されるように、どこか観音像やマリア像を思わせる。しかしそれに対して作者は批判的な眼差しを注いで

いるであろうか。作者は、語り手に佐助の墓石を愛撫させているが、そうした共感的な姿勢は、恐らく作者のものでもあったと考えるのが自然であろう。

そうしてみると、「グリープ家のバーバラの話」において、批判の対象となっているその根本の naïve な信心の中へ、『春琴抄』は退行している事になりはしないか。犯人の鼻を明かしてやったと痛快がる佐助の心理が、もし西洋の鼻を明かしてやったと痛快がる作者（及び読者）の心理に短絡しているとしたら——それは注意深く吟味してみなければならぬ問題であろう。谷崎の訳を読んでいると、一々指摘することは省略するが、「グリープ家のバーバラの話」のそうした機微が、谷崎の関心を擦り抜けている事がかなりはっきりと窺える。例えば、次のような、別にハーディーの専売という訳ではないが、西洋の一流の作家によく見られる、18世紀を切り、その返す刀で19世紀を切り、バーバラの偽善を切り、その返す刀で偽善の対象をも切るといった critical な精神は、谷崎の訳では読み過ごしてしまいそうである。

The year passed, and he did not return ; and it was doubted if he were alive. Barbara's contrition for her unconquerable repugnance was now such that she longed to build a church-aisle, or erect a monument, and devote herself to deeds of charity for the remainder of her days. To that end she made inquiry of the excellent parson under whom she sat on Sundays, at a vertical distance of a dozen feet. But he could only adjust his wig and tap his snuff-box ; for such was the lukewarm state of religion in those days, that not an aisle, steeple, porch, east window, Ten-Commandment board, lion-and-unicorn, or brass candlestick, was required anywhere at all in the neighbourhood as a votive offering from a distracted soul--the last century contrasting greatly in this respect with the happy times in which we live, when urgent appeals for contributions to such objects pour in by every morning's post, and nearly all churches have been made to look like new pennies. As the poor lady could not ease her conscience this way, she determined at least to be charitable, and soon had the satisfaction of finding her porch thronged every morning by the raggedest, idlest, most drunken, hypocritical, and worthless tramps in Christendom.⁽¹²⁾

どのような言語も、芸術的たらんとすれば、それ独自の economy を有している事は自明の理であろう。谷崎は「正宗白鳥氏の批評を読んで」（昭和7年7月『改造』）において、その前の月に小林秀雄が『新潮』に引用したドライサーの『アメリカの悲劇』の一部を取り上げ——そして同じ箇所を谷崎は『文章読本』（昭和9年11月）でも引用しているのだが——「日本人なら、もつと短い気の利いた文章でこれだけの効果を擧げることは難事ではあるまい」と述べている。しかしながら、日本文学を西洋語に翻訳する楽天的な西洋人の翻

訳者は、恐らく攻守所を変えた全く同一の、そして遙に手厳しい苦情を申し立てる事であろう。

「陰翳礼讃」(昭和8年12月-昭和9年1月『経済往来』)も、『春琴抄』と踵を接するこの時期に執筆されており、そこに展開された論も、その文章論と同様、西洋を意識した伝統的な日本の美感的擁護になっていて、『春琴抄』を支える美学を窺う上で見逃す事は出来ない。谷崎が横浜時代に、非常に「西洋的」な生活を送っていた事はよく知られており、それが関西移住後の所謂「日本回帰」と鮮やかな対照を見せているのだが、例えば、「友田と松永の話」(大正15年1月-5月『主婦之友』)などを見ても、東西の二重分裂は、決して深刻な闘ぎ合いというものではなく、どちらがより多くの美的快味を与えるかという ego-centric な視点での、言ってみれば贅沢な悩みに他ならず、それは谷崎が少なからず書いている東と西の問題全てに通じているようである。

では『春琴抄』は、13歳の精神年齢の国民に相応しい「痴呆の芸術」なのであろうか。

「正宗白鳥氏の批評を読んで」において谷崎は、「私の近頃の一つの願ひは、封建時代の日本の女性の心理を、近代的解釈を施すことなく、昔のままに再現して、而も近代人の感情と理解に訴へるやうに描き出すことである。女大學流の道德や倫理を信じそれに縛られてゐる一人の女性を、眞に生かして書いてみたいのであるが、何事にも慎み深く、感情を殺すことにばかり馴らされて生活し、夫以外の男子にはめつたに顔を見せなかつた往時の女子を主人公として、その微妙な心の動きを寫し出すことは容易でない。見かけは貞女のやうな女にも、形に現はれない不倫な戀があつたであらうし、嫉妬、憎悪、残虐、その他いろいろな背徳な感情のかげが淡く胸中を去來したのであらうが、それらを少しも外に出さないで、内部でばかり生きてゐたさう云ふ女を、髣髴と浮かび上らせることは極めてむづかしい」と述べており、この抱負の少なくとも一部が『春琴抄』に実現されているとするならば、それは優れた作家のみがよく為しうる難事である事、論を俟つまい。

『春琴抄』の解釈を巡って、俗に「お湯掛け論争」と呼ばれるものがある事は、よく知られている。「佐助犯人説」、「春琴自害説」、「佐助・春琴黙契説」、またそれらの説を異端邪説として激しく排斥する「佐助・春琴無罪説」などが提出されている。⁽¹³⁾ 佐助が押し入れに籠って三味線の練習をし、春琴の住む世界に同化したいとの気持ちを漏らす「失明願望」、事件に遭った37歳の時の春琴の唯一の写真が残っている偶然にしては出来過ぎた一致、「鴟屋春琴伝」にある、苦吟している春琴の声を聞いて佐助が目覚めたのを察知した賊が狼狽して逃げるときに熱湯を掛けたという時間的に辻褄の合わない記述、台所で湯を沸かし臥所に持ち込みまともに湯を春琴の顔に注いだという鳴澤てる女等の話と、有明行灯の灯が消えて真っ暗であったという温井検校の談として伝えられるものの矛盾など、含みのありそうな記述が多く、また、谷崎の推理小説的嗜好、意識の共謀といったモチーフの

頻繁な使用を思えば、春琴や佐助に犯意があったという説は、いずれも根拠なしとは決めつけ難く、また、上に引いた「正宗白鳥氏の批評を読んで」に見られる、「背徳な感情」を含む様々な女性心理の陰翳を描きたいという抱負を考慮すれば、春琴・佐助の間に取り交わされた心理劇は、決して単純素朴なものではなかったはずである。穿った言い方をすれば、こうした批評が出てくる事自体、『春琴抄』が虚構としての reality を獲得している事を裏付けている。犯人が判然としない場合、第一発見者や被害者本人に嫌疑が及ぶのは、もしこれが現実の事件であれば自然の事だからである。「春琴抄後語」にある何よりも「ほんたうらしさ」を求めたという作者の企ての成功が、時間をかけて証明されつつあるようなものだ。しかし「後語」の末尾の、春琴の心理が描けていないという批判に対して、なぜ心理を描く必要があるのか、あれで分かっているではないかという、谷崎の倨傲なまでの、自信に充ちた言葉通りに、佐助や春琴の心理がなるほど手に取るように分かると、果たして読者は言い切れるのであろうか。

真実が語られているかどうか覚束ない記述や伝聞に基づいた語りからは、春琴の失明についても、妊娠についても、確定的な事実は演繹できず、曖昧なままにされている事を思えば、犯人についても、畢竟藪の中の運命は免れまい。佐助が犯人であるとも、春琴の仕組んだ自害であるとも、春琴が佐助に謎を掛けて行かせたのであるとも解釈の余地は存在するであろうが、どれか一つに解釈を固定すると、二人の至福は白々しいものに墮してしまふ。そうかといって逆に、語り手の推測に沿って、利太郎が犯人であったとし、ないしは「春琴の商売敵である某検校か某女師匠」であったとして、谷崎に春琴、佐助に嫌疑を掛ける意図が毫末もなかったと想定してみると、皮肉な事に、作品の味わいは随分減殺されてしまうのである。

事件前の春琴と佐助の関係は、春琴の矜持と加虐、佐助の拝跪と被虐が一方にあり、他方に「見られる」春琴、「見る」佐助という、逆転された立場が加味され、それだけでも一種妖しい eroticism が醸成されている。そしていつしか春琴は妊るのであるが、読者は、佐助が相手であるかどうかは臆なままに安んじて、三味線の稽古で春琴が佐助を苛み、佐助がひいひい泣いている図や、佐助が、春琴の、掌に載るほど小さくて白い蹠を暖めるために、それまで蹠を入れていた懐からそって抜いて、歯痛で火照った頬に、おためごかしに押し当てると、その頬を春琴がいやという程蹴り飛ばすという図などから、妊るに至る過程を想像する仕儀となるのである。佐助の性格は、ともすると、西洋の貴婦人に仕える騎士のようにも取られかねないけれども、密かな練習であるべき三味線の稽古を、最初は蒸し暑い押し入れの中で、その暗闇を春琴の世界だと感じ嬉しく思いながらやっていたが、そのうちにその嬉しい暗闇を出て、おおっぴらに物干し台で弾くようになり、利太郎の梅見の宴会で、春琴の世話を措いたまま、老妓に勧められるままに盃を重ねたり、先の

春琴の冷たい足を齒痛に火照る頬を冷やすのに拝借したり、少しずうずうしいちゃっかりした性質も看守されるのである。確かに、律義なだけでは、「盲目の美女の筈」の「不思議な快感」は味わえないかもしれない。春琴が妊った時にも、もし佐助が父親であったなら「知らぬ存ぜぬの一点張り」を通すのにもそうしたずうずうしさが幾分かは必要であろう。しかし一方で、態度がおどおどしたり、辻褃の合わないことを言ったりもしていて、それが正直で不器用な憎めない印象を読者に与える。自分そっくりの赤ん坊に生まれてこられるようでは、凶太い悪人にはなれそうもない。そうであればこそ、晩年春琴を失ってから、「春琴の皮膚が世にも滑かで四肢柔軟であつたことを左右の人に誇」ってやまない佐助ののろけにも、読者は羨みこそすれ、疎んじたりはしないのである。

火傷を負った時、春琴は37歳、「姥桜」の最後の絢爛さを見せていた。「色飽く迄白くして襟元などは見てゐる者がぞく／＼と寒気がするやうに覺えた甲の色のつやつやとした小さな手をつましく膝に置いて俯向き加減にしてゐる盲目の白のあでやかさは一座の瞳を悉く惹き寄せて恍惚たらしめたのであつた。」しかしこの後に迫っている情け容赦のない老いは、現在享受している秘めやかな無邪気な幸福を必ずや損なわずにはおくまい。これが「佐助犯人説」や「春琴自害説」の拠って立つ最も大きな動機である。

しかしここでも『春琴抄』は、一般には悲劇の種である「老い」の逆手を取って、真実の成熟を助ける天佑に転じている。三島由紀夫の指摘する、佐助が眼を突くことの「去勢」の暗示は、これまでの「見る・見られる」という、視覚に過大に依存するいびつな性愛に終止符を打つ、という意味でなら有効性を持つかもしれない。この後この二人が、視覚以外の感官を通じて、余人の思いも及ばぬ豊かな乾坤を味わったであろう事は、直接的な描写が一切なくとも、読者にはそれとなく感得出来るよう、作者は苦心を凝らしている。火傷を受ける直前の梅見で、「春琴の纖手が佝屈した老梅の幹を頻りに撫で廻す」のを見て、一幫間が「あゝ梅の樹が羨しい」と奇声を発する場面があるが、遊里的な下卑た笑いに取り紛れてはいるものの、この盲人の梅見という、一見奇異にも見える図には、春琴が触覚を通して老梅と交歓している様、幫間が奇声を発するほどその姿が艶いていた様が鮮やかに描出されている。また『春琴抄』ではとりわけ聴覚が強調されていて、春琴の小鳥道楽の描写は、春琴の贅を語るかに見せて、むしろ目明きには聞き取れない玄妙な聴覚の世界がある事を暗に教えている。

鴟屋の鴟、鴟澤てるの鴟と揃って韻でも踏むかのような、「駒鳥鸚鵡目白頬白」や雲雀、そして鶯といった鳥たちは、物語の前半部と後半部を美しく繋いでいると同時に、その鳴声についての美学は、春琴の芸術観にも、更には、春琴自身の気構えにも通じているようである。

人或は云はん、斯くの如きは人工の美にして天然の美にあらず、谷深き山路に春を訪ね花を探りて歩く時流れを隔つる霞の奥に思ひも寄らず啼き出でたる藪鶯の聲の風雅なるに如かずと、然れども妾は左様には思はず、藪鶯は時と所を得て始めて雅致あるやうに聞ゆる也、その聲を論ずれば未だ美なりと云ふべからず、之に反して天鼓の如き名鳥の囀るを聞けば、居ながらにして幽邃閑寂なる三峡の風趣を偲び、溪流の響の潺湲たるも尾の上の櫻の飄飄たるも悉く心眼心耳に浮び來り、花も霞もその聲の裡に備はりて身は紅塵万丈の都門にあるを忘るべし、是れ技工を以て天然の風景とその徳を争ふもの也音曲の秘訣も此處に在りと。

恐らく居ずまいを正して言われたであろう春琴のこの言葉は、犯し難い気韻に充ち、「天鼓」の聲の靈妙さを語って余りあるが、この鶯を育てる「大豆と玄米を炒つて粉にした物へ糠を交へて白粉を製し、別に鮎や鮓の干したのを粉にした鮎粉と云ふものを用意して此の二つを半々に混じ大根の葉を擦つた汁で溶き、「聲をよくするためには蓼莢といふ蔓草の莖の中に巢食ふ昆虫を捕つて來て日に一匹或は二匹宛與へる」面倒な食事の手間は、春琴が「平素魚鳥の料理を好み分けても鯛の造りが好物で当時の婦人としては驚くべき美食家であり」、佐助が「鯛のあら煮の身をむしり、「蟹蝦等の殻を剥き、「鮎などは姿を崩さずに尾の所から骨を綺麗に抜き取」って春琴の膳に供した手間と呼応しており、春琴の聲については綺麗であったとしか述べられていないものの、読者は、気韻と高雅さの中に馥郁とした色香を湛え、天然自然の妙を髣髴せしめるような春琴の肉声を、ほとんど我が耳に聞くことが出来るような気さえし、そしてそれがあの関西の、柔らかな、けれども勁い言葉の息吹と化して耳朶に触れる時の、佐助の艶福を秘かに想うのである。

佐助は盲目になってから、聴覚が鋭敏さを増し、春琴の弾く妙音を聞き分けられるようになったと述懐する。また春琴も、人生の苦味酸味を嘗める事によって芸道の真諦に參ずることが出来るようになり、「恋愛に於ても芸術に於ても嘗て夢想だにもしなかつた三昧境のあることを教え」られたのであろうと、語り手も憶断している。鳴澤てる女の伝える、絃を弄ぶ春琴の傍で「佐助が恍惚として項を垂れ一心に耳を傾けている光景」は、二人の法悦境を裏書きするものでもあろう。

ところで、佐助は、盲目になる事によって、永劫不変の春琴像を暗い網膜に刻み付けたと前述した。この談も、もし佐助が醜怪に変化した春琴の容貌を一度も目にした事がないというのであれば得心も出来よう。しかし「佐助お前は此の顔を見たであろうの」という春琴の思い余ったような問いに、佐助は「いえいえ、見てはならぬと仰つしやつてゞござりますものを何でお言葉に違ませうぞ」と請け合い、また「焼け爛れた顔を一と眼見たことは見たけれ共正視するに堪へずして咄嗟に面を背けた」と述べているものの、蓐中で云々と呻っている春琴の枕元に行った佐助が、春琴を揺り起こそうとして「我知らずあと

叫んで両眼を蔽うた」云々という談は、「面を背けた」「両眼を蔽うた」の齟齬にも見られるように全幅の信頼を措けず、それどころか読者の心証は、むしろ逆に、佐助は春琴の変じ果てた顔をまざまざと見てしまったのではないかという方に傾くのではなからうか。そうであれば、一度眼にしてしまった強烈な像は、脳裏に焼き付き、その後眼を潰したからといって、それほど易々と払拭出来るものであろうか。自然に考えれば、払拭しようとするほど、バーバラの場合のように、逆に残像はその恐怖を増すはずである。しかし佐助の行為には、これといって悲壮な感じは少なく、眼を潰したのも、春琴が見られるのを厭ったればこそその話で、自分の恐怖に怯えてというような気配は微塵もない。それはよく思ってみると異常な話である。彼にとっては火傷も、「陰翳礼讃」の、「蘭燈のゆらめく陰で若い女があゝの鬼火のような青い唇の間からときどき黒漆色の齒を光らせてほほ笑んでいるさま」の「幽鬼じみた美しさ」の一変奏に過ぎないかの如くである。そうすると佐助にとっては、春琴の焼け爛れた顔の残像も、永遠の春琴像の敵ではなく、むしろ春琴の美を一層高めてくれる妙薬とも言える。佐助は、火傷を負った後の春琴の、白い裸身の凄絶な美しさを秘かに暗い網膜の上で慈しんでいたのではないだろうか。

「グリーブ家のバーバラの話」においても、バーバラは、ベッドの足下に置かれた恐るべき彫像の“strange fascination”に抗しきれず、それに何度も眼を吸い寄せられている。この“scourge”が、アップランドタワーズ伯爵が彼女に加える変態性の性的行為として描かれている事は言うまでもない。バーバラの“quiver”は、彼の残虐な欲望の焰を煽り、何度も何度も彼女を苛もうとする。三晩目のバーバラは、最初から“immense wild eyes”で、彫像を貪るように見つめている。それは彼女が、恐怖という快味に馴致された証左であるが、過度な刺激はついに彼女の精神の皮膜を貫き破り、彼女は狂ったような笑い声と叫び声を発する。それを境として、彼女は過去の自分を葬り去るのである。その後のバーバラについて、谷崎訳は、彼女が「意地の悪い冷酷な夫の色欲の道具になつた」とバーバラに同情的に暈して訳してあるが、原文の“obsequious amateness towards a perverse and cruel man”が匂わすものは、バーバラが、伯爵の残虐な変態性の性愛に順応し媚びるようになったという事である。大理石の彫像といえども所詮はこの浮世の物質であってみれば、脆く儂いものには相違ないが、バーバラにとって、彫像が、生身の肉体の移ろい易い美と対置された、「永遠の美」というアイデアそのものを体現している存在であったとすれば、それを破壊するという伯爵の行為は、悪魔的な所業という色彩を帯びている。(ハーディーが伯爵を描く筆致にはその気味がある。)バーバラが縋っていた、宗教的に昇華され歪曲された性愛は、彼女の生の誇りを抱擁してくれる唯一の虚偽の恩寵であったろう。しかし、その虚偽の皮膜が、残忍に、完膚なきまでに剥ぎ取られるに及んで、彼女は一切の精神的矜持を喪失した、唯の肉塊になったのである。

* * * *

なるほど「グリーブ家のバーバラの話」の後半部分は、dramaがあって読者を息もつかせず最後まで運び去るのだが、おどろおどろしい割には底が割れていて陰翳がなく、「性」の臓腑が百燭光の眼光の下に曝され、味気なく解析されているような感がある——と、そんな風に谷崎なら言うかもしれない。春琴と佐助の住む世界は、それとは別種の、虚偽を虚偽と知りつつ許し、いたぶるも甘露、いたぶられるも甘露、驕慢と吝嗇は気韻の薬味に、火傷の醜は幽鬼の美に変じ、盲目は他の感官の開眼の機縁となるような、この世に生を享けたその移ろいゆく生の、苦味も甘味も最後の一滴まで、掌で押戴くようにようにして味わい、それを以て天に謝すような、所謂もののあわれの世界である。美貌のエドモンドは、醜怪な傷によってアイデアの座から転落したが、春琴は、醜怪な傷を内部に抱え込んだまま、佐助の柔らかな網膜の上でアイデアと化したと言ってもいいかもしれない。

「春琴は明治十九年六月上旬より病気になったが病む数日前佐助と二人中前裁に降り愛玩の雲雀の籠を開けて空へ放つた照女が見てみると盲人の師弟手を取り合つて空を仰ぎ遙かに遠く雲雀の聲が落ちて来るのを聞いてゐた雲雀は頻りに啼きながら高く／＼雲間へ這入りいつ迄たつても降りて来ない餘り長いので二人共氣を揉み一時間以上も待つてみたが遂に籠に戻らなかつた」——この『春琴抄』最終節冒頭の場面で、雲雀が地上から天上へと帰る事によって、春琴の魂が天上に帰る刻限が近づいた事が告げられる。盲いて共に老いた春琴と佐助が、手をつなぎ、天を仰ぎ、舞い上がる雲雀の聲が落ちて来るのを聞いている姿の何と胸を打つ事であろう。この場面を谷崎がどのような思い入れを以て書いているのか定かではないが、一見して尤もらしいアイデア界への帰還のイメージの裏で、それとは正反対の情動が働いているような気もしなくはない。「肉塊」の中に次のような一節がある。

お伽噺の中などにある哀れな小鳥、——高い高い青空の、雲の上へ舞登ろうとする志はあり乍ら、翼を切られて、息苦しい籠の中に入れられて、羽ばたきさへも自由には出来ない哀れな小鳥、——吉之助はつまりそれだつた。彼には日本が氣にいらぬ、だが、日本を離れて遠くへ飛び去ることも出来ない。彼には商人が性に合はない、だが、商賣を捨てて立つて行くだけの技能もない。彼には幻の女がある、だが、その女は決して彼の籠の中へはやつてこない。彼は手足を十重二十重に縛られて生きてゐるのだつた。

佐助は、それを以て自分の本懐となしているのだから、春琴の籠の中の小鳥である事に——沙翁の言葉を借りて言えば、“a wanton’s bird; Who lets it hop a little from her

hand, Like a poor prisoner in his twisted gyves, And with a silk thread plucks it back again, So loving-jealous of his liberty”⁽¹⁴⁾ である事に——それほど不満はないかもしれない。しかしある意味からすれば、現実の男女がそうであるように、春琴も、佐助の籠の中の鳥であった、佐助が春琴の籠の中の小鳥であるよりも一層そうであったと言い得るかもしれない。佐助と言う男にかいがいしく世話をされ、美しさと矜持を保つ事を暗に強制されているような生活、少し気が折れそうになると、そういう春琴を見るのが悲しく、哀れな気の毒な春琴を見るのが堪えられない佐助の暗々裡の誘導によって、再び気韻に満ちた女を演じ続けなければならない生活は、佐助よりも気骨の折れるものではなかっただろうか。縋帯の上から涙を押し拭う春琴の姿には、彼女の中に隠された柔らかな心情、奥に隠されていてこそ似つかわしい本当の濃い情愛のようなものが、透けて見えるようである。春琴が、最初に妊った子供も、その後佐助との間に生まれた二人の子供も、すぐに里子に出しているのは、何か冷淡な印象を与えてしまいそうなものだが、そうしてみると、春琴が黙って独りで嚙下さねばならなかった交々とした想いも、臍に甦ってくるようでもある。雲雀は、春琴の共感に満ちた、優しい無言の言葉を察し、籠から解き放たれ、自由の天地に戻っていったのかもしれない。

* * * * *

『春琴抄』の冒頭部で、「夕霞の底に大ビルディングが數知れず屹立する東洋一の工業都市を見下ろしながら、永久に此処に眠っている」「奇しき因縁に纏われた二人の師弟」の墓を訪れ、「春琴女の墓前に跪いて恭しく禮をした後檢校の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫しながら夕日が大市街の彼方に沈んでしまふまで丘の上に低徊してゐた」語り手の胸中には、どのような想いが去来していたのだろうか。その中には、もうこの近代の日本には、再び春琴のような女性は生まれる事はないであろうという感慨が多分含まれていたであろう。佐助の墓の石頭を愛撫する語り手の手には、苦勞を勞う気持ちと、良き時代に生を享けた幸運を羨む気持ちが綯い交ぜになっていたであろう。個人と社会の澹に、その moral を模索する事を一つの存在意義として発生した西洋種の「小説」というジャンルの特質は、「グリーブ家のバーバラの話」にも部分的に発揮されているが、『春琴抄』の語り手は、ただ岡の上に低徊し、觀照に時を費やしている。谷崎は「藝談」(昭和8年3月-4月、即ち『春琴抄』の直前、『改造』に発表、原題「『藝』について」)の中で、

藝術家がいかにか臆病でも自分の天分に安んじて藝を研いてゐるうちには、藝のためになら命を惜しまないと云ふ気にもなり、知らず識らず死に身の覚悟が出来て来る。それが藝術家の勇氣である。今日では政治が常識になり、萬人が政治を論じて差支へない時勢であるとは云ふものの「非

常時」と云ふやうな時になると左右兩黨の迫害が激しいから、西洋の文人を気取つて余計なことに口を挟むと、それこそ芥川の云ふやうに引つ込みが付かなくなる。そんな暇があつたら、せっせと藝道に精進した方が利口であるとしか考へられない。⁽¹⁵⁾

と述べている。谷崎は、佐助の眼を潰した方法は「この時期の芸術家としての谷崎潤一郎の存在の仕方を象徴的に示している」のではないかという伊藤整の評言⁽¹⁶⁾を褒めたという。出来過ぎた話のようではあるけれども、昭和8年当時の、日増しに軍靴の音が高まっていく歴史的文脈の中に『春琴抄』を置いてみると、春琴の災禍は、一面で、近代の日本が決定的に受けた醜い傷を象徴しているようにも解釈出来よう。そうした時流の中で、谷崎は、意図的に現実に目を閉ざす事によって、在りし日の美と共に生きる生き方を選択した、少なくとも、そう生きる他なかったと——佐助の生き方に自分のそれを重ねる、そういうふうな意図が、『春琴抄』執筆時から念頭にあったかどうかは推測の域は出ないものの、谷崎が近代日本に対する批判を強めていた事は彼の多くの文章に見られる所であり、佐助の一種異様な行為の裏に、西洋文学に対する烈しい対抗意識と同時に、もっと異様な、近代日本の現実の病弊——そしてそれは今では更に悪質化して進行しているように見受けられるのであるが——に対する、芸術家としての反骨が籠められている可能性も否定は出来ないと思われるのである。

—— 註 ——

- (1) 『佐藤春夫全集』第11巻、468頁。
- (2) テキストには *The Works of Thomas Hardy* (Macmillan, 1912-1914), Vol. XIV の *A Group of Noble Dames* を用いた。以下、Hardy と略記する。
- (3) Hardy, p.73.
- (4) 野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』(六興出版、昭和47年) 376頁。
- (5) Hardy, p.78.
- (6) 谷崎松子『倚松庵の夢』(中央公論社、昭和42年) 77-78頁参照。
- (7) Hardy, p.88.
- (8) Hardy, p.88.
- (9) 千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』(小沢書店、1994年) 所収。
- (10) 日本文学研究資料刊行会編『谷崎潤一郎』(有精堂、昭和47年) pp.143-157.
- (11) 千葉俊二前掲書所収『「タイプ」の発見』『プラトニズムの淵源』参照。
- (12) Hardy, pp.76-77.
- (13) 「佐助犯人説」については、野坂昭如「春琴抄」(『国文学』昭和53年8月)、「春琴自害説」については、秦恒平『谷崎潤一郎』(筑摩書房、1989年)、「佐助・春琴黙契説」については永栄啓伸『谷崎潤一郎試論——母性への視点——』(有精堂、1988年)、また「佐助・春琴無罪説」については、

久保田修『「春琴抄」の研究』（双文社出版、1995年）の議論を参照。

- (14) *Romeo and Juliet*, Act II, Scene ii, 178-182.
- (15) 『谷崎潤一郎全集』第20巻、453頁。
- (16) 伊藤整『谷崎潤一郎の文学』（中央公論社、昭和45年）153頁参照。